論文

乃木殉死事件と「明治の精神」の形成

――元号から考える夏目漱石『こゝろ』――

村瀬士朗

1、元号法制化と「明治の精神」という解釈コード

「明治の精神」という言葉は、夏目漱石の『こゝろ』を読む際、特に『こゝろ』が高校国語教科書の定番教材になる一九七〇年前後から、作品解釈のキーワードとして中心化されてきた。

『こゝろ』の定番教材化の時期は、丁度、明治百年をめぐる様々な企画が開催され、それを一つのきっかけとして、戦後の「皇室典範」の改正で法的根拠を失っていた元号の法制化に向かう動きが活発化していく時期に重なっている。

一九六八年には「明治百年祭」事業が挙行され、明治改元の一〇月二三日にはメインイベント「明治百年記念式典」が、天皇皇后はじめ閣僚、国会議員、在日外交団など約一万人が参加して、日本武道館で開催された。それに先立つ一九六五年には愛知県犬山市に「明治村」が開園。維新の中心を担った薩摩＝鹿児島では「明治百年記念館」計画が立ち上げられ、「鹿児島県歴史資料館黎明館」となって設立・開館。同年、昭和の明治ブームを代表する企画『明治文化全集』を刊行した「明治文化研究会」の会長で、「明治百年記念式典」の企画にも携わった木村毅を編集委員の一人とする『明治文学全集』の刊行が始まる。一九六六年には戦前の「紀元節」二月一一日を、「建国をしのび、国を愛する心を養う」という趣旨で「建国記念の日」として、祝日として復活させることが決定され、翌一九六七年に公布、施行された。一九六七年には『明治文化全集』の増補再々刊の刊行も開始される。

元号法制化をめぐっては、昭和天皇在位五〇周年式典を一九七五年に政府主催で開催することが検討されたころから、昭和天皇崩御後も元号を使用し続けるか否かが問題視されるようになり、活動が活発化していた。一九七二年には自由民主党内閣部会に元号問題小委員会が設置され、昭和天皇在位五〇周年式典を挟んで、一九七八年には元号法政府案が示されることになる。翌一九七九年六月に国会に法案が提案・可決され、即時、公布・施行された。

「明治の精神」が、特に高校国語の教材として、『こゝろ』解釈のキーワードとなった背景には、元号の政治性をめぐる、そのような動きがあったのである。

キーワード：『こゝろ』、「明治の精神」、乃木殉死事件、元号

2、「一世一元の制」と「先生」の時代意識

「明治の精神」というマジックワードの機能について考えるために、前提として日本の近代社会において元号が持たされた性格について、基本的なことを確認しておきたい。

「元号」という言葉が使われるようになったのは明治時代になってから後、「皇室典範」制定の際、天皇の代替わりと改元を一致させる「一世一元の制」が定められ、それまで一般的に「年号」と言っていた年数を数えるための言葉を「元号」と呼ぶようにしてからのことである。この時から天皇の追号（諡）を元号と一体化させるようになって、天皇を元号で呼ぶようになった。このことは近代という時代における元号という制度の機能を考える上で一つのポイントとなる事柄である。全ての国民が、それによって毎日の生活を行っていく基準となる暦を天皇と一体化させ、それによって一つの時間、一人の天皇を中心とする国民意識が作り上げられたのである。

明治日本の最大の課題は、近代国家にふさわしい「国民」という意識を、一人一人の個人にどう持たせたらいいかということにあった。「日本は政府ありて國民（ネーション）なし」(1)とは福沢諭吉が『文明論之概略』で述べた有名な言葉であるが、そのような国民意識の欠如を埋める方法として考えられたものの一つが、天皇による時間意識の支配、つまり「元号」という時間の制度だったのである。

「国民意識」を作り上げる、そのような明治政府の政策が、目に見える形で効果を上げたのが、明治天皇崩御の際の国民の反応である。天皇が亡くなって元号が変わることになると、国民は激しい喪失感にとらわれるという現象が発生し、その中で「天皇と共に生きた時代」という意識が生まれたのである。

そのような国民の反応を題材として取り込んで描いたのが、夏目漱石の『こゝろ』である。

> すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。
>
> 「私は殉死という言葉を殆んど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。
>
> （中略）
>
> 私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。(2)（傍点論者。以下『こゝろ』の引用文の傍点は、全て論者が付したものである。）

「明治の精神」という言葉、「明治」という元号によって作り上げら

れた時代意識が、「時勢後れ」という意識と、「時勢の推移から来る人間の相違」という世代の断絶の意識を生み出していることを読み取ることができる。「一世一元の制」によって、天皇の交替によってはじめて元号が替わるということになって、改元という事柄は天皇の代替わりと一致することになった。明治以降の改元が、全て父から子への天皇の代替わりによってなされているように、近代では改元は天皇の世代交代を意味することとなり、そのことが改元によって、一つの時代、一つの世代が終わったという印象を強く与えることにつながった。「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました」「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました」という「先生」の感覚は、そのような「一世一代の制」によって作られた元号による時代意識、世代意識の典型であるといえる。

3、「先生」の世代意識と漱石の世代意識

「先生」の遺書の中には、この遺書の受け手である青年に対する世代の違い、先の引用文の「先生」の言葉を使うなら「時勢の違い」を強調する言葉が繰り返し出てくる。

私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。(3)

斯んな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育つたあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿々々しい感じを起すでせう。私も実際馬鹿々々しく思ひます。然し彼等は今の学生にない一種質朴な点をその代りに有つてゐたのです。(4)

「私は御嬢さんの立つたあとで、ほつと一息するのです。夫と同時に、物足りないやうな済まないやうな気持になるのです。私は女らしかつたのかも知れません。今の青年の貴方がたから見たら猶左右見えるでせう。然し其頃の私達は大抵そんなものだつたのです。(5)

今と違つた空気の中に育てられた私共は、学生の身分として、あまり若い女などと一所に歩き廻る習慣を有つてゐなかつたものです。(6)

今から思ふと、其頃私の周囲にゐた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種を有たないのも大分ゐたでせうが、たとひ有つゐても黙つてゐるのが普通の様でした。比較的自由な空気を呼吸してゐる今の貴方がたから見たら、定めし変に思はれるでせう。それが道学の余習なのか、又は一種のはにかみなのか、判断は貴方の理解に任せて置きます。(7)

『こゝろ』における「先生」の世代意識＝元号による世代の断絶の意識は、これまで作者である夏目漱石自身の世代意識の表れだと考えられてきた。

明治天皇の後を追って乃木希典陸軍大将夫妻が自殺する事件が起こった際、乃木が院長を務めていた学習院出身の白樺派をはじめとする若い世代の文学者たちから、強烈な批判の声が上がる。それに対し

て漱石や森鷗外のような、乃木に近い世代の文学者たちは、その行動を高く評価して乃木を擁護した。「先生」の世代意識は、そのような白樺派たち若い世代の文学者に対する、漱石の世代断絶の意識の表れであると考えられてきたのである。

次に白樺派の志賀直哉と武者小路実篤、そして漱石の晩年の弟子であった芥川龍之介の乃木殉死に対する反応を見てみよう。

乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時、「馬鹿な奴だ」といふ気が、丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた。(8)

（志賀直哉「日記」一九一二年九月一四日（土））

自分は世界的、人類的の生活にゆかない国民的生活は浅薄なものだと云ふのである。

自分が「我々は何時までも支流に居たくない、本流にとびこんで自分の力だけのことをしたい」と云つたのは云ふまでもなく東西思想の融合した世界思想に生きて、その世界において出来るだけのことをしたい、乃木大将のやうに一地方的の思想に身を殺すやうなことで満足はしたくないと云ふのである。

（中略）

乃木大将の殉死はある不健全なる時が自然を悪用してつくり上げたる思想にはぐゝまれた人の不健全な理性のみが、讃美することを許せる行動である。(9)

（武者小路実篤「三井甲之君に」、『白樺』第三巻一二号、一九一二年一二月）

いずれも乃木殉死に対する反応としては有名な文章であるが、「丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな」という、いかにも志賀らしいあけすけな差別意識に基づいた侮辱的な感想もさることながら、武者小路の「人類的」という言葉に、白樺派の世代の典型的な評価軸が表れている。天皇に殉死するという乃木の行動は、日本人にしか通用しない「一地方的の思想」だという武者小路の批判は、元号という日本人にしか通用しない時間の区切り方の意識に通じている。乃木の殉死、そしてそれに倣った『こゝろ』の「先生」の「明治の精神に殉死する」という内に閉じたドメスティックな思想を武者小路は「人類的なところがない」と批判していたのである。

もう一つ、乃木批判の作品として有名な、芥川龍之介の「将軍」(10)という小説を見てみよう。

「閣下のお前がたに遠いと云ふのは？」

「何と云へば好いですか？——まあ、こんな点ですね、たとえば今日追悼会のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に——」

青年は真面目に父の顔を見た。

「写真をとる余裕はなかつたやうです。」

（中略）

「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出来ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。……」

父と子とは少時の間、気まずい沈黙を続けてゐた。

「時代の違ひだね。」

少将はやつとつけ加へた。(11)

日露戦争に出征し、乃木のもとで戦った中村という軍人が、自宅で息子と会話している場面である。乃木に深い敬愛の情を抱いている父に対して、息子の方は乃木に対してシンパシーを感じられないという。特に殉死を決意した乃木が決行の日の朝、写真屋を呼んで記念写真を撮影していたことに対し、息子は強い違和感を覚え、乃木の「至誠」を主張する父の世代に対し、自分にはそれがピンとこない、自分より後の世代の人間にはなおさらだろうと言うのである。

父がその息子の言葉に、「時代の違ひだね」と答えているように、ここでも乃木の死をめぐる評価によって、父の世代と息子の世代の間に断絶の意識が生じている。

先に述べたように、このような白樺派や芥川など若い世代の乃木に対する厳しい批判に対して、漱石は乃木の行動に共感し、それを高く評価していたと考えられている。一例として『漱石辞典』の「乃木希典」の項の佐々木英昭の解説を見てみよう。

後続世代の芥川龍之介や志賀直哉、里見弴らが露骨に侮蔑した乃木のこの死に様に漱石がむしろ推服したことは、『心』前年の講演「模倣と独立」にも明らかだ。(12)

佐々木が漱石の乃木事件の評価の根拠として挙げている「模倣と独立」(13)という講演を確認しておく。

乃木さんが死にましたらう。あの乃木さんの死と云ふものは至誠より出でたものである。けれども一部には悪い結果が出た。夫を真似して死ぬ奴が大変出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを真似する人が多いと思ふ。さう云ふ奴が出たのは仮に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあつても、乃木さんの行為の至誠であると云ふことはあなた方を感動せしめる。夫が私には成功だと認められる。(14)

第一高等学校で行われたこの講演が、若い世代を意識したものであったことは明かであり、『将軍』の中村が乃木の「至誠」を主張していたように、ここでの漱石も「あの乃木さんの死と云ふものは至誠より出でたものである」「乃木さんの行為の至誠であると云ふことはあなた方を感動せしめる」と乃木の行為に「至誠」を見て高い評価を与えている。『こゝろ』の「先生」の遺書の言葉が、若い世代である青年に向けられたメッセージであることを考えれば、佐々木が言うように、『こゝろ』という作品は、「模倣と独立」に見られるような漱石の乃木評価の表れであり、若い世代の文学者に対する漱石の反論であり態度表明なのだということになりそうだが、「先生」の言葉だけではなく、「先生」の行動に目を向けて、それを乃木の殉死との比較で検討してみると、それだけではない問題がこの作品には表現されているのではないかと考えられる。次節では、『こゝろ』が執筆・発表された時期との関連で、別の角度からこの問題を検討してみたい。

4、パートナーの死と夫婦関係の倫理

乃木殉死事件に対する反応として『こゝろ』という作品を考える上

で取り上げたいのが、藤井淑禎の「天皇の死をめぐって―『こゝろ』その他」[15]という論文である。

一般的には人々の記憶が薄れゆくこの時点で天皇の死が作中にとりこまれた背景に思いをめぐらす時、『こゝろ』の構想・執筆と並行するかたちで〝もう一つの御大葬〟がとりおこなわれていた事実に注目しないわけにはいかない。

夫である明治天皇の死後、必ずしも体調が万全ではなかったらしい皇太后（のちの昭憲皇太后）が静養先の沼津御用邸で慢性の気管支カタルと腎臓炎に誘発された狭心症の発作をおこしたのは大正三年三月二十六日のことであった。その後尿毒症を併発し、再度の狭心症の発作と心臓麻痺によって崩御（四月十一日）に至るまでの新聞紙面は、連日詳細な容態のレポートと皇族・国民の反応を報じた記事によって埋めつくされ、さながら二年前の天皇崩御の折の再現の観がある。（中略）そうした雰囲気の中で『こゝろ』の連載は開始（4・20）されていたわけで、症状が似通っていた（明治天皇の場合も腎臓炎と尿毒症をひきおこしていた）こともあわせて、作中の天皇の死には皇太后の死が重ね合わされていたのではないか。

（中略）

『行人』から『こゝろ』を経て『道草』へと、この時期の漱石が夫婦の問題から決して目をそらさなかったことを思えば、天皇の死・明治の終焉は皇太后の死を待って初めて完結した意味をもつことになったともいえるし、再三にわたる胃潰瘍による危機をくぐり抜けいっそう死を身近に感じるようになった漱石の肉声が、先生や私の父が繰り返し口にする「おれが死んだら、御前はどうする」という妻への思いにこめられていたとしたら、二年足らずして夫のあとを追った皇太后の生と死は漱石にとって決して無関心ではいられないものであったにちがいない。天皇の死と皇太后の死を老夫婦の最期をめぐる問題として捉える視点が漱石のなかに育っていたとすれば、それは「近づき易く親しみ易くして我等の同情に訴へて敬愛の念を得らるべし」との皇室観を洩らした漱石にとっていかにもふさわしい見方であったということができるだろう。[16]

藤井はここで、明治天皇の崩御から二年もたった一九一三（大正三）年になって、なぜ漱石がそれを題材にした『こゝろ』という作品を書いたのかということについて、興味深い見解を述べている。『こゝろ』が執筆・連載されるまさにその時期に、明治天皇の皇后・昭憲皇太后が病気になり、崩御するという出来事が起こっていた。二年前の明治天皇の病気と崩御という出来事の再現のようなこの出来事に触発されて『こゝろ』は書かれたのではないかという仮説である。

最晩年の明治天皇は自分の体調に不安を感じていて、「わしが死んだら御内儀はめちやめちやになるだらう」と、自分の死後の皇太后のことを心配していたという証言[17]があるが、一九二〇（大正九）年に創建された明治神宮が明治天皇夫妻を祭神とし、二人の関係を象徴するものとして「夫婦杉」が植えられるといった夫妻の没後の動きも含めて、この時期、明治天皇の死をめぐって夫妻の物語が広く流布していたことを考えれば、皇太后の病気と崩御をめぐって、明治天皇夫妻の関係のあり方に新聞読者の関心が向けられる状況があったであろうことは想像に難くない。『こゝろ』がそのような世間の反応に触発されていた可能性は十分にあり得るであろう。

『こゝろ』には自殺する「先生」と、後に残される静の関係の問題が、語り手の青年の父の死と、残されることになる青年の母の行く末の問題と重ね合わされるように書かれている。

> 「然しもしおれの方が先へ行くとするね。さうしたら御前何(ど)うする」
> 「何うするつて……」
> 奥さんは其所(そこ)で口籠つた。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更(か)へてゐた。
> 「何うするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていふ位だから」
> 奥さんはことさらに私の方を見て笑談(じようだん)らしく斯(か)う云つた。(18)

> 「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣つてくれ」
> 私は此「おれが死んだら」といふ言葉に一種の記憶を有つてゐた。東京を立つ時、先生が奥さんに向つて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑を帯びた先生の顔と、縁喜でもないと耳を塞いだ奥さんの様子とを憶ひ出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であつた。今私が聞くのは何時起るか分らない事実であつた。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかつた。然し口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。(19)

『こゝろ』に描かれたこの二組の夫婦の関係、パートナーの死によって残された妻の問題の背景に、二年前に世を去った明治天皇の後を追うようにして亡くなった昭憲皇太后の崩御が影を落としているというのが藤井の説だったわけだが、もう一つ最期の迎え方をめぐる夫婦の関係の問題として、「先生」夫婦と明らかに重ねられていたと考えられるのが、妻とともに殉死＝自殺をした乃木夫妻の関係である。

『こゝろ』が乃木の殉死という行動だけでなく、妻の静子もともに命を断った乃木夫妻の行動を強く意識していたことは、乃木の殉死を報じる新聞を読んだ語り手の青年が、新聞に載せられていた夫妻の写真、静子夫人の姿に言及していることに表れている。

> 乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。
> 「大変だ大変だ」と云つた。
> 何事も知らない私達は此突然な言葉に驚ろかされた。
> 「あの時は愈(いよいよ)頭が変になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私に云つた。「私も実は驚ろきました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。
> 其頃の新聞は実際田舎ものには日毎に待ち受けられるやうな記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室(へや)へ持つて来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女見たやうな服装(なり)をした其夫人の姿を忘れる事が出来なかつた。(20)

自決当日の明治天皇大喪を伝える新聞を読む乃木と、傍らに立つ静子夫人の姿を写したこの写真(21)は、各新聞に掲載されて有名になるが、この写真に違和感を覚えた読者がいたことは、先に見た芥川の

『将軍』で、自決の当日写真を撮ったことに、自殺した自分の友人にはそんな余裕がなかったと、若い世代の軍人の息子が強い違和感を示していたことからも窺われる。

　そのような乃木夫妻の最期をめぐる賛否両論の存在を踏まえてみれば、自殺をめぐって「先生」が遺書に書いていた文章は、乃木夫妻の自殺を強く意識したものであったと考えることが出来る。[22]

> 私は今日に至る迄既に二三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進まうとした事があります。然し私は何時でも妻に心を惹かされました。さうして其妻を一所に連れて行く勇気は無論ないのです。妻に凡てを打ち明ける事の出来ない位な私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪ふなどゝいふ手荒な所作は、考へてさへ恐ろしかつたのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります。二人を一束にして火に燻べるのは、無理といふ点から見ても、痛ましい極端としか私には思へませんでした。[23]

この「先生」の言葉は、明治天皇への殉死という乃木の死の意味を完成させるために妻が夫とともに命を断った乃木夫妻の自殺に対する強い批判として読める[24]。「私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります」という、妻を独立した個人としてその人生を尊重する「先生」の考えに、白樺が主張した個人主義に通じる思想を見ることもできるだろう。そうしてみれば、『こゝろ』は乃木の死を批判する若い世代に対する漱石の反論、態度表明だという従来の考えには再考すべき問題が残されているのではないだろうか。

　しかし、妻を道連れにしないという「先生」の自死のあり方、「妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうに」[25]するという「先生」の行動は、『こゝろ』という作品の中で、必ずしも全面的に肯定的されているわけではない。

　「先生」が自殺するのはKを自殺に追い込んだという罪障感に起因している。しかし、その罪の意識、自殺の理由について、「先生」は妻の静には一切打明けることをしない。石原千秋[26]が指摘しているように、「先生」が静にKの自殺のいきさつについて打明けないことの背景には、Kが自殺した原因に静がかかわっているのではないかという「先生」の根深い疑惑が存在していると考えられる。

> 「私はとう〳〵辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、御前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕様がないんです、涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです」
>
> 奥さんは眼の中に涙を一杯溜めた。[27]

「私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい」という静の訴えに対して、「御前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にある丈だ」と答えて、「先生」は罪を共有しようとしない。妻に対する疑惑を抱えたまま、決してそれを口にすることなく自分だけで罪を抱え込む夫。そのような妻との関係の持ち方の延長上に「先生」の死の選び方がある。「先生」の自死のあり方は、決して全面的に肯定されているわけではないのだ。

『こゝろ』が発表された日露戦後社会において「女性の幸福」の理想像（ステロタイプ）が「良妻賢母」にあったことを考えれば、静はそこから何重にも阻害されている。

「良妻」であることは、「内助の功」すなわち夫の仕事の成功で証明される。しかし「先生」は、大学を卒業したまま、父から相続した財産が生む利子だけで生活していて、一切働こうとはしない。大学を卒業した語り手の青年が、どのくらいの財産があったら「先生」のような生活が出来るかと尋ねたのに対して、静が「あなたは是から何か為（な）さらなくつちや本当に不可（いけ）ませんよ。先生のやうにごろ〳〵許（ばかり）してゐちや……」(28)と苦言を呈していたことに見られるように、静は「先生」が働こうとしないことに対して、妻として不満を持っていたはずである。一方「賢母」であるためには、当然ながら、子供が生まれることが必要である。しかし、「子供でもあると好いんですがね」(29)という静に対して、「先生」はその願いを断ち切るように、「子供は何時迄経つたつて出来つこないよ」(30)と断言している。石原千秋が推定しているように(31)、その背景にKをめぐる「先生」の静への疑惑と、それに基づくセックスレスの関係があったとすれば、「先生」には子供を作る意志そのものがなかったのだと考えられる。

「先生」との関係において、静が「良妻賢母」という同時代的な「女性の幸福」の理想像実現への道を断たれていたことを考えれば、夫婦の死の迎え方は静に残された最後の「幸福」実現の可能性であったと考えられる。

> 「是ばかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちやんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生の御父さんや御母さんなんか、殆んど同（おん）なじよ、あなた、亡くなつたのが」
> 「亡くなられた日がですか」
> 「まさか日迄同なじぢやないけれども。でもまあ同なじよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」
> 此知識は私にとつて新らしいものであつた。私は不思議に思つた。
> 「何（ど）うしてさう一度に死なれたんですか」
> 奥さんは私の問に答へやうとした。先生はそれを遮つた。
> 「そんな話は御止（よ）しよ。つまらないから」
> 先生は手に持つた団扇をわざとばた〳〵云はせた。(32)

「先生」の両親がほとんど同時に亡くなったことを特別な思いをも持って記憶して、それを青年に語ろうとする静の言動からは、夫婦が死を共にするという、いわば「心中願望」を見て取ることが出来る。「良妻賢母」という同時代的な「女性の幸福」のステロタイプから疎外された静に残された女性としての「幸福」の、別様の類型実現の可能性、それが「先生」と罪を共有し、共に死ぬこと、つまり「心中願望」だったのである。

しかし、「奥さんは私の問に答へやうとした。先生はそれを遮つた」とあるように、ここでも「先生」はそのような静の願望を拒絶している。「先生」は静には一切を秘したまま、知られることなく、一人で死んでいくという自死の方法を選択することによって、この秘められた静の最後の願望を拒絶するのである。

夫婦が死をともにすることで天皇への殉死を完成させた乃木も、妻と罪を共有することを拒んで一人で死んでいく「先生」も、どちらも

夫婦関係の持ち方という点ではエゴイズムにとらわれていたということができるだろう。自殺に際して乃木とは正反対の態度をとった「先生」だが、妻の声を聞こうとしなかったという点では、同じような自己完結性を持っていたのである。

「先生」の死をめぐる「先生」と静の会話に、語り手の青年が特別な意味を見出していたことは、静の発言を制止する「先生」のしぐさが「手に持った団扇をわざとばた〱云はせた」と表現されていることに示されている。ここには「先生」の自死の選択と、そこに示された夫婦関係の持ち方に対する青年の関心と批判が表れているのである。

そのように考えると、「明治の精神」という、天皇と一体化した元号を指標とする時代区分によって世代を断絶する「先生」の発想法とは異なり、『こゝろ』を書く漱石自身は、むしろそこにエゴイズムという連続性を見ていたといえるのではないだろうか。「先生」は青年に向かって、「自由と独立と己れに充ちた現代に生まれた我々」と、自分と青年を同じ個人主義の時代の人間として語っていた。漱石が『こゝろ』で書いたのは、むしろ、乃木殉死に対する評価を指標として世代の違いを主張する白樺派らの若い世代と、それに反論する上の世代双方の、時代や世代を断絶する発想そのものへの批判だったとも考えることが出来るだろう。

5、エゴイズム批判と「明治の精神」

冒頭で述べたように、『こゝろ』が高校国語教科書の定番教材化していく時期は、明治百年と元号法制化をめぐる動きが活発化していく時期に重なっていた。

佐藤泉[33]は『こゝろ』が教材として採用される背景に、「個人」というものに対する意味付けが、民主主義社会を構成する自立的な主体というポジティブな意味から、利己主義＝エゴイズムというマイナス面の強調へと転換する国語教育の変化を指摘している。戦後民主主義からの揺り戻しの中で、民主主義を支えるものとして確立すべき目標とされていた自立した個人という考え方が、「いきすぎた個人主義」＝エゴイズムという形で批判、反省され、マイナスの価値づけがなされるようになっていく。そういう流れの中で定番教材化されたのが『こゝろ』であり、作品読解の鍵とされたのが「明治の精神」という言葉と「明治の精神に殉死する」という「先生」の行動だった。「明治の精神」という言葉は、そのような戦後民主主義からの揺り戻しの動きの中で、エゴイズム批判という文脈に作品を回収するマジックワードとして機能させられていたのである。

『こゝろ』という作品と「明治の精神に殉死する」という「先生」の行動は、元号をめぐって近代に形成された国民意識、それによって切り分けられた時代意識、世代意識のありようを顕在化させる。その機能を保全しようという動向は、二〇一八年の「明治一五〇年記念式典」の開催やそれに先立つ「明治日本の産業革命遺産」のユネスコ世界遺産登録という一連のイベント、そして二〇一九年の「令和」改元とその関連イベントにまで及んで、今日も継続、強化されている。その意味で、『こゝろ』と「明治の精神」というマジックワードについて検討することは、近代日本社会の制度を考える上で、さまざまなレベルで重要な意味を持っていると考えることが出来るだろう。

注

(1)『福沢諭吉全集』第四巻、岩波書店、一九六九年、一五四頁
(2)『定本 漱石全集』第九巻、岩波書店、二〇一七年、二九七~二九八頁。以下、本論の『こゝろ』の引用は全て『定本 漱石全集』によるが、ルビは適宜省いた。
(3)(2)に同じ。一五七頁
(4)(2)に同じ。一六一頁
(5)(2)に同じ。一八七頁
(6)(2)に同じ。一九六頁
(7)(2)に同じ。二二六頁~二二七頁
(8)『志賀直哉全集』第二巻、岩波書店、一九九九年、二一二頁
(9)『武者小路実篤全集』第一巻、小学館、一九八七年、四八九頁、四九五頁
(10)芥川龍之介「将軍」『改造』四巻一号、一九二二年一月
(11)『芥川龍之介全集』第八巻、岩波書店、一九九六年、一八五頁~一八七頁
(12)佐々木英昭「乃木希典」『漱石辞典』翰林書房、二〇一七年、六六頁
(13)夏目漱石「模倣と独立」第一高等学校講演会(一九一三年一二月一二日)。この講演をまとめたものとしては第一高等学校校友会『校友会雑誌』第二三二号(一九一四年一月五日発行)が初出となるが、分量・内容共に大幅に整備された最初の『漱石全集』(岩波書店、一九一七年)所収の講演録で読まれることが一般的であるので、本論でもこれによることとする。
(14)『定本 漱石全集』第二六巻、岩波書店、二〇一九年、三六九頁
(15)藤井淑禎「天皇の死をめぐって―『こゝろ』その他」『国文学 解釈と鑑賞』四七巻一二号、一九八二年一一月
(16)(15)六七頁~六八頁
(17)日野西資博『明治天皇の御日常』新学社教友館、一九七六年、七五頁
(18)(2)に同じ。九七頁~九八頁
(19)(2)に同じ。一三〇頁
(20)(2)に同じ。一三五頁~一三六頁
(21)乃木殉死事件をめぐる新聞記事では、夫婦それぞれの写真も掲載されているので、語り手が言及している写真は必ずしも夫婦がともに写っている写真の方であるとは限らないが、ここでは多くの読者がイメージしたであろうもっとも有名なこの写真のことと考えておく。
(22)この点については『定本 漱石全集』第九巻の「注解」(重松泰雄)に、「前に「奥さんの名は静といつた」(二四頁)とあり(乃木夫人の名も静子)、また後に、「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに」(二九八頁)とある点からみて、このあたりに独自の乃木評が託されていることは十分に考えられる」という指摘がある。
(23)(2)に同じ。二九五頁~二九六頁
(24)『漱石文学全注釈12』(若草書房、二〇〇〇年)で藤井淑禎が述べているように、「乃木の場合も妻を道連れにするつもりはなかったことが、広く知れ渡っていた」が、ここで「先生」が問題にしているのは、乃木や静子夫人の意志ではなく、明治天皇に殉死する乃木に静子夫人が殉じてともに命を絶つという夫婦の行為と、そこに表れた夫婦の関係の持ち方であると考えられる。
(25)(2)に同じ。二九八頁~二九九頁
(26)石原千秋は「『こゝろ』のオイディプス 反転する語り」(初出『成城国文学』創刊号、一九八五年三月)で、「「策略家」(下十五)としてのお嬢さん(静)と奥さん(その母)という見方はようやく定説になりつつある。お嬢さんと奥さんとが、煮え切らない先生に、Kに対する嫉妬を起こさせるような「技巧」を用いて結婚にまで踏み切らせた、と言うのである。(中略)先生自身は、「奥さんと同じやうに御嬢さんも策略家」だとする「疑惑」と、お嬢さんへの「信念」とを、「私には何方も想像であり、又何方も真実であつた」(下十五)としているが、確かに二人ともが「策略家」として読めるように語られているのである」(『反転する漱石 増補新版』、二〇一六年、一九八頁~一九九頁)と述べている。なお、石原は「「策略家」としてのお嬢さん(静)と奥さん(その母)という見方」を示している先行論文として、松本洋二「『こゝろ』の奥さんと御嬢さん」(『近代文学試論』第一七号、一九七八年一一月)、寺田健「お嬢さんの〝笑い〟―漱石『こゝろ』の一視点」(『日本文学』一九八〇年七月)、秋山公男「『こゝろ』の死と倫理―我執との相関―」(『国語と国文学』一九八二年二月)、米田利昭「『こゝろ』を読む」(『日本文学』一九八四年一〇月)の四本を挙げている。
(27)(2)に同じ。五二頁
(28)(2)に同じ。九四頁
(29)(2)に同じ。二四頁
(30)(2)に同じ。二四頁
(31)石原千秋は(25)の前掲論文で、「思いきって言えば、「子供」ができないのは静の「処女性」の暗喩であってもよいはずだ」(二〇三頁)と述べている。小森陽一は「座談会『こゝろ』論争以後」(飯田祐子・石原千秋・小森陽一・関礼子・平岡敏夫、『漱石研究』第六号、一九九六年五月、一八九頁)で、石原の論を受けて、「先生が自分とお嬢さんとの関係においてKを裏切ったのだから、Kに対する倫理性を貫くために子供をつくらないというふうに考えている」のであれば、「先生はKに対して倫理性を貫いているが、「奥さん」に対する倫理性というのは一切介在していないということ」になる。「「奥さん」が子供をもつことを願っているということが、ごくわずかだけれども表明されている」ことを踏まえれば、「それへの応答として、先生が何らかのかたちで絶対子供はできないと断言でき

るように振る舞っていたとすれば、それはやっぱり奥さんとの関係は無視されていることに」なると発言している。
(32)（2）に同じ。九八頁～九九頁
(33) 佐藤泉「こゝろ」『夏目漱石事典』勉誠出版、二〇〇〇年、一二〇頁～一二一頁

［付記］

＊本論は、二〇一九年七月二七日に鹿児島国際大学附属図書館視聴覚ホールで行われた「令和元年度 鹿児島国際大学第一回公開講座　令和のはじまりを文学から考える」における講演「夏目漱石『こゝろ』から考える元号／文学」を基にしている。

＊本論は、学校法人津曲学園から許可された令和三年度在宅研修の研究調査「夏目漱石の小説作品の研究」の報告である。